『失われた時を求めて』における太陽のイメージ -窓越しに見える光景-

メタデータ	言語: ja 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2023-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松原,陽子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000147

明治大学教養論集　通巻571号
（2023・9）pp. 41–51

『失われた時を求めて』における太陽のイメージ
―窓越しに見える光景―

松　原　陽　子

はじめに

『失われた時を求めて』において、太陽のイメージは小説の主題と結び付けられ、重要な役割を果たす。本稿では、太陽をめぐる色彩とイメージをたどり、それが小説のモチーフや結構とどのような関係を持つのか分析したい。

Ⅰ　太陽とカフェオレ売りの娘

『花咲く乙女たちのかげに』に登場するカフェオレ売りの娘は朝日とともに描かれる。そこで、まずはこの登場人物をめぐる描写をたどることから始めたい。

主人公「私」が祖母と一緒にバルベックに旅行に出かけるのは、初恋の相手であったジルベルトにほとんど無関心になったころである［II, 3］[注1)]。鉄道での長旅の途中、停車した駅で、「私」は汽車の窓越しにカフェオレ売りの娘を見かける［II, 16］。彼女が登場する場面に注目してみよう。

> 峡谷の奥の急流の先には、一軒の詰所しか見えず、その建物は窓すれすれに流れる水のなかに沈んでいるようだった。私がひとりでメゼグ

リーズのほうにあるルーサンヴィルの森の中をさまよっていたときに、あれほど姿を現してほしいと思った農家の娘よりもいっそう、ひとりの人間が土地の産物で、彼女の内にその土地固有の魅力を味わわせてもらえるとすれば、私が先ほど詰所から出てくるのを見た背の高い娘がそれに違いない。その娘は朝日が斜めに照らしていた小道の上に現れ、牛乳の入った大きな壺を持って駅の方にやってくるのだ。［II, 16］

カフェオレ売りの娘は、「朝日が斜めに照らしていた小道の上に現れ」、「私」の目にその土地の産物であると思えるのである。

草稿で、この登場人物はどのように描かれているのだろうか。草稿カイエ2において、彼女は「16歳の背の高い娘」とされているのに対して[注2)]、最終稿では年齢についての言及はなく、「背の高い娘」と記されている。また、カイエ2において、バラ色の空の下で「私」にカフェオレを渡す娘はバラ色の肌と赤い髪を持つ[注3)]。最終稿でもバラ色の空の下に現れる彼女の頬はバラ色だが、髪の色については具体的な言及がない。

草稿と最終稿の比較を続けると、この登場人物の動きにも違いがあることに気づかされる。草稿では、彼女が一瞬、客車に入ってくることが明記される[注4)]。それに対して、最終稿で「私」は汽車の窓ガラス越しに彼女を見ていて、カフェオレを持って来るように合図するが、汽車が出発してしまい、カフェオレを受け取ることはできない［II, 17-18］。

さらに彼女が登場する前の場面をたどってみよう。バルベックへの長旅に出た「私」は、夕方ひとりで汽車に乗って夜を過ごし、汽車の窓から日の出を見る。

［…］窓ガラスのなかの黒い小さな森の上に、えぐられた雲が見え、その雲の柔らかな綿毛は固定された生気のないバラ色をしていた。そのバラ色は、もう変化することがなく、その色を吸収した翼の羽根を染

> める色か、画家の空想によってパステル画の上におかれた色のようである。［II, 15］

ここで雲は柔らかな綿毛と翼の羽根の比喩を用いて描かれている。特に注目したいのはバラ色の色彩である。このあとバラ色の色彩は活気づき、空は鮮やかなバラ色に変わる［II, 15］。線路の向きが変わり、バラ色の帯となった空が見えなくなったことを「私」が悲しがっていると、再び赤い帯状になった空が向かいの窓のなかに現れるのだ［II, 16］。

> ［…］私は時間を費やして一方の窓から別の窓に駆け寄って、私の美しい真っ赤で移り気な朝の間歇的で相反する断片を近づけ、新たな画布に移し替え、全体の眺めをとらえて、ひとつらなりの絵画にしようとした。［II, 16］

汽車の窓ガラスを通してバラ色から赤い色に変化する帯状の空の描写に続いて、カフェオレ売りの娘が描かれる。反射光に照らされた彼女の顔色もまた空の色よりも鮮やかなバラ色である。

> 彼女［カフェオレ売りの娘］は車両に沿って歩き、目を覚ました旅行客にカフェオレを提供していった。朝の光の反射で深紅に染められた彼女の顔は空よりもバラ色であった。［II, 16］

彼女を前にして、「私」は生きたいという欲望、美と幸福をあらたに意識するたびに再生する欲望を強く感じる［II, 16］。そして「私」は娘の傍で暮らすことを夢見る。

> 人生の一瞬一瞬を彼女［カフェオレ売りの娘］とともに過ごすことが

> でき、急流のところまで、雌牛のところまで、汽車のところまで彼女に連れ添って、常に彼女の傍らにいて、彼女の頭の中に占める場所があり、彼女に知られていると感じることさえできれば、人生は私にとって甘美なものに思えたことだろう。彼女は私に田舎の生活と一日の始まりの時間の魅力を教えてくれただろう。［II, 17］

カフェオレ売りの娘は美と幸福を象徴する存在として、「私」に生きる欲望を感じさせるのである。しかも、指摘されているように、『失われた時を求めて』において、カフェオレを飲むことは一種の蘇生の儀式である[注5)]。

色彩に着目すると、カフェオレ売りの娘の頬は太陽の光に照らされてバラ色になる。いっぽう、カイエ 32 では空の色は赤色である[注6)]。「私」はカフェオレ売りの娘の素早い動きや落ち着いた眼差しを見て、彼女と牛の乳しぼりに行って、赤い空の下にある森の中で駆け回りたいと願う[注7)]。この場面で空の色は赤であるのに対して、最終稿では、空の色はバラ色になる［II, 16］。

ところで『失われた時を求めて』において、バラ色はカフェオレ売りの娘だけでなく、ジルベルトやアルベルチーヌ、海辺の少女たちのイメージを彩り、小説の主要なモチーフと結び付いていることを想い返そう[注8)]。サンザシのバラ色は「私」の初恋の相手であるジルベルトを彩る［I, 137-141］。バルベックの海辺に現れる少女たちはバラの花々に擬えられ［II, 156 ; 242-245 ; 258-260］、少女たちのグループの一員であるアルベルチーヌも一輪のバラと化す［III, 577］。

空の色の描写に続き、カフェオレ売りの娘の顔は太陽の光でバラ色と黄金色に輝く。

> 私は、カフェオレを持ってくるようにと、彼女［カフェオレ売りの娘］に合図した。私は彼女に気づいてもらう必要があった。彼女は私の姿

> に気づかなかったため、私は彼女を呼んだ。とても大柄な身体のうえで、彼女の顔色は黄金色とバラ色に輝いていて、光に照らされたステンドグラスを通して見ているかのようだった。［II, 17-18］

彼女の顔色はステンドグラスを通して見ているかのように、黄金色とバラ色に輝くのだ。

指摘すべきは、草稿において、太陽に照らされた黄金色とバラ色の雲が繰り返し描写されていることである。たとえばカイエ 64 で、窓は黄金色とバラ色の雲を描いた習作に喩えられる[注 9)]。また、同じ草稿の別の箇所でも、「私」が閉じられた窓から目にするのは、夕日に照らされ、黄金色になった雲である[注 10)]。そして、黄金色とバラ色は最終稿でカフェオレを売る娘の顔色となるのだ。

最終稿の続く場面では、娘の顔は太陽に擬えられ、金色と赤色の色彩で私の目をくらませる。

> 彼女［カフェオレ売りの娘］は引き返してきた。私は彼女の顔から目をはなすことができないでいた。その顔はじっと見つめることができそうで、すぐ近くにまで近づいてくる太陽のように、だんだん大きくなるけれども、近くで見ると金色と赤色の色彩で目をくらませられる。彼女は私に鋭い視線を向けたが、従業員たちがドアを閉めたので、汽車が動き出した。私は彼女が駅を離れ、小道を引き返していくのを見た。今や、すっかり夜が明け、私は曙光から遠ざかってしまっていた［II, 18］。

「私」が暁の光から遠ざかるとともにカフェオレ売りの娘は去って行ってしまう［II, 18］。振り返ってみると、鳥の綿毛と羽根の比喩を用いて描かれた空と娘の顔のイメージが重ねられていることは偶然ではあるまい。停車駅で

束の間、目にした娘は、汽車が出発すると、すぐに「私」から離れていくことになり、飛び去る鳥のようでもあるからだ。「私」はしばらく後に、バルベックのホテルにクリームを届けに来たこの娘に再会する［II, 74］。再会の翌日にもらった手紙を彼女からのものと勘違いし、それが作家ベルゴットからのものであることがわかって落胆する［II, 74］。その後、「私」が彼女と会うことは二度とない。

上記の場面で、太陽の比喩にも注目したい。太陽を背景として、「私」に近づいてくるカフェオレ売りの娘の顔は「すぐ近くにまで近づいてくる太陽」に喩えられる［II, 18］。そして、その顔色は金色と赤色の色彩で「私」の目をくらます［II, 18］。

『スワン家のほうへ』においても、バルベックの太陽が同じ色で形容されることを指摘しておきたい。ルグランダンが「私」の家族に語ったことによると、バルベック近くではオージュ地方の夕日、すなわち赤色と金色の夕日が見られるのである［I, 128-129］。

カフェオレ売りの娘の描写に続いて描かれるバルベックの教会にもバラ色と金色の色彩が用いられていることに注目したい。バルベックの教会の丸屋根は、太陽の光に照らされてバラ色と金色に染められる。

> そして教会は、カフェや道を尋ねなければならなかった通行人、戻っていく駅とともに私の関心をひき、他のすべてのものと一体化し、午後の終わりの偶然の産物のように思えた。午後の終わりのなかで、空の上でふんわりと膨らんだ丸屋根は、家々の煙突を浸しているのと同じ光がそのバラ色と黄金色でとろけるような皮を熟させた果物のようであった。［II, 19-20］

このように教会はバラ色と黄金色の果実に擬えられる。金色とバラ色、そして赤色の色彩によって、空の色、朝日に照らされるカフェオレ売りの娘の顔

色、そして教会の色が結び付けられていくのだ。

Ⅱ　「夜明けの悲しみ」と太陽のイメージ

バルベック旅行の場面の下書きとされるカイエ32でも太陽が描かれており、その描写は『ソドムとゴモラ』の「夜明けの悲しみ」の場面に移し替えられていることが指摘されている[注11)]。ところが、この場面は、上記の『花咲く乙女たちのかげに』に見られるバルベック旅行における日の出の場面とは対照的である。そこで、この「夜明けの悲しみ」の場面を確認してみよう。アルベルチーヌがヴァントゥイユ嬢の女友達と親しいという話をきいて、嫉妬に苦しむ「私」は美しい夜明けを見る［III, 512］。

> 昇ろうとしている太陽の光は、私のまわりの物の姿を変えることで、一瞬、私の苦しみに対する私の位置を変えるかのように、私により一層残酷なほど私の苦しみを意識させた。私は今までこれほどまでに美しく苦痛に満ちた朝が始まるのを見たことがなかった。明るく照らされていく風景、前日はまだそこを訪れたいという欲望でだけ私を満たしていたあらゆる風景に無関心になっていることを思うと、嗚咽を抑えることができなかった。そのとき、機械的に遂行される奉献の動作のように、私が毎朝、人生の終わりまであらゆる喜びを変えなくてはならないであろう血まみれの供犠を、つまり夜明けごとに厳粛におこなわれる私の日常の悲しみと私の傷口の血の更新を象徴するように思える動作のように、金色の太陽の卵が凝固のときに密度の変化によって均衡が破られて押し出されるように、絵画のなかでのように、炎のぎざぎざに覆われて、ひと飛びで、幕を破った。その幕の裏ではしばらく前からそれが打ち震え、舞台に飛び出そうと準備しているのが感じられていた。そしてその神秘的で凝固した深紅色は太陽の光の波の

下にかき消された。［III, 512-513］

カフェオレ売りの娘をめぐる描写と同様に、この場面でも用いられる色彩は金色と深紅色である。「血まみれの供犠」や「傷口の血」、「凝固」という表現から、「私」の悲しみや苦悩と結び付けられる血のイメージと日の出の描写が重ねられていることが指摘できよう。

同様に、『悪の華』における「夕べの諧調」に見られる一節では、太陽と血のイメージが結び付けられている[注12)]。「夕べの諧調」の一節を確認してみよう。

空は大きな仮祭壇のように美しく悲しい。
太陽は血のなかでおぼれ、その血は凝固していく。[注13)]

この一節は上記の『ソドムとゴモラ』における「夜明けの悲しみ」の場面、そして「金色の太陽の卵が凝固のときに密度の変化によって均衡が破られて押し出される」という表現を想わせる。

『ソドムとゴモラ』の続く場面で、「私」が窓枠のなかの光景として目にするのは、バルベックの浜辺、海と日の出の背後に現れるモンジュヴァンの部屋のイメージである［III, 513-514］。そこで、アルベルチーヌはバラ色の顔をして、ヴァントゥイユ嬢の女友達になりかわる［III, 514］。大きな雌猫に喩えられる彼女は、身体を丸め、官能的な笑い声をあげる。そのときバルベックの海は金色に輝く水面に覆われている。さらに、ここで注目すべきは、日の出が夕日のイメージに重なり、「私」にとって、現実のバルベックの浜辺と海と日の出が現実味を失って絵に描かれた情景にしか見えず、夕暮れ時の空しい光景となることである。朝日が夕日のイメージを想起させるのである。

金色は、「私」の苦痛を呼び覚ます町を彩る色彩でもある。アルベルチー

ヌは「私」にヴァントゥイユ嬢の女友達とイタリアの町、トリエステで何年か過ごしたことを打ち明ける［III, 499］。トリエステでは夕日が黄金色に染められ、カリヨンの音が悲しく響く［III, 505］。アルベルチーヌのゴモラの性質を知った「私」は、彼女をトリエステに行かせないようにパリの自宅に幽閉してしまうことになる。

ところで『失われた時を求めて』において、金色は同性愛と結び付けられる色彩であった[注14)]。アルベルチーヌの金色の視線は『金色の目の娘』を想起させ、同性愛を暗示するものと考えられる。そもそも、「私」の苦しみは『スワン家のほうへ』で、幼年時代に母親がおやすみを言いに「私」の部屋にあがってきてくれない日、つまりスワンが招待客として「私」の家を訪れ、鈴の「楕円形で金色の音色」を響かせたときから始まったのではなかったか［I, 13-14］。

以上のように、金色と深紅色に彩られる太陽は、『ソドムとゴモラ』の終わりで、物語が大きく展開する場面で描写される。ここで、アルベルチーヌに飽きて彼女との別れを決意していたはずの「私」はアルベルチーヌの悪徳を確信し、涙を流す。そして、彼女と別れるどころか、彼女を自宅に幽閉することになるのである。同様にフローベールの作品でも、物語のクライマックスで太陽や太陽の比喩が描かれている[注15)]。とりわけ、『聖アントワーヌの誘惑』で現れる金色の巨大な太陽の描写は、『ソドムとゴモラ』のそれを想わせる。そこで、『聖アントワーヌの誘惑』の最後の場面を確認してみよう。この場面では、アントワーヌの祈りのあと、太陽が現れる。

> そのとき空が裂け、広い範囲で雲が巻き上げられ、太陽が露わになった。それは、広がった斜めの光線を発する<u>金色の巨大な太陽</u>で、真ん中に現れ、天幕の紐が押し開かれるように、厚い雲のふくらみの間を通ってきた。[注16)]

この場面で描かれる太陽は、『ソドムとゴモラ』において、幕を破って飛び出す炎に覆われた「金色の太陽の卵」を想わせる。このように、フローベールの作品においても、『失われた時を求めて』においても、太陽は物語のクライマックスで現れるのだ。

おわりに

太陽は『花咲く乙女たちのかげに』でカフェオレ売りの娘が登場する背景として現れるばかりでなく、彼女の描写において、比喩として用いられる。色彩に注目すると、空の色、そして朝日に照らされるカフェオレ売りの娘の顔色に続いて、教会の色が描かれており、金色とバラ色から金色と赤色、そして再び金色とバラ色の色彩がこれらの描写を紡いでいくことが確認できた。日の出とともに現れたカフェオレ売りの娘は、美と幸福の象徴として、「私」に生きたいという強い欲望を感じさせるが、汽車が駅を離れていくとき、日が高くなるときには去ってしまっている、はかない存在である。

いっぽう、『ソドムとゴモラ』において、夜明けの太陽のイメージは「私」の苦悩と悲しみに重ねられる。美しい夜明けは、「私」にとって、これから人生の終わりまで繰り返されるであろう「血まみれの供犠」の場となる。ここで「私」は日の出の背後に、モンジュヴァンの恐ろしい情景を見る。そして日の出は夕日のイメージとも結び付けられる。この場面はボードレールの詩における血と太陽の描写だけでなく、フローベールの『聖アントワーヌ』のクライマックスで現れる太陽の描写をもとに描かれたと考えられる。

このように、『失われた時を求めて』における太陽のイメージは両義的である。『花咲く乙女たちのかげに』でカフェオレ売りの娘の背景に現れた朝日が美と幸福を表すのに対して、『ソドムとゴモラ』における夜明けの太陽のイメージは血のイメージ、そして夕日のイメージと重ねられ、恋愛の苦悩と悲しみに結び付けられるのである。

注

注 1）『失われた時を求めて』の参照には以下の版を使い、本文中［ ］内に巻数とページ数を記す（訳は拙訳である。なお引用文中の強調は本稿の著者による）― Marcel PROUST, *À la recherche du temps perdu*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, 4 vol., 1987-1989.

注 2）吉田城、「『車窓の夜明け』の 4 つの草稿 : モチーフの増殖と変貌」、『Gallia』20 号、大阪大学フランス語フランス文学会、1981 年 3 月、38 頁を参照。

注 3）吉田城、『「失われた時を求めて」草稿研究』、平凡社、1993 年 11 月、127 頁から 128 頁を参照。

注 4）吉田城、「『車窓の夜明け』の 4 つの草稿 : モチーフの増殖と変貌」、前掲論文、37 頁を参照。

注 5）吉田城、『「失われた時を求めて」草稿研究』、前掲書、134 頁から 136 頁を参照。

注 6）同書、131 頁を参照。

注 7）同書、131 頁を参照。

注 8）拙論「『失われた時を求めて』における舞台芸術―小劇場の演者―」、『ステラ』第 37 号、九州大学フランス語フランス文学研究会、2018 年 12 月、218 頁を参照。

注 9）Voir Mireille NATUREL, *Proust et Flaubert : un secret d'écriture*, Éd. Rodopi B.V., Amsterdam / New York, 2007, p. 275.

注 10）Voir *Idem*.

注 11）吉田城、「『車窓の夜明け』の 4 つの草稿 : モチーフの増殖と変貌」、前掲論文、42 頁を参照。

注 12）Voir Mireille NATUREL, *op. cit.*, p. 275.

注 13）BAUDELAIRE, *Œuvres complètes*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, 1961, p. 45.（訳は拙訳である）

注 14）拙論「『失われた時を求めて』におけるイメージと色彩―登場人物の瞳と背景をめぐって―」、『ステラ』第 38 号、九州大学フランス語フランス文学研究会、2019 年 12 月、64 頁を参照。

注 15）Voir Mireille NATUREL, *op. cit.*, pp. 203-204.

注 16）Gustave FLAUBERT, *Œuvres*, t. III, édition publiée sous la direction de Claudine GOTHOT-MERSCH avec la collaboration de Jeanne BEM, Yvan LECLERC, Guy SAGNES, et Gisèle SÉGINGER, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2013, p. 144.（訳は拙訳である。なお引用文中の強調は本稿の著者による）

（まつばら・ようこ　商学部専任教授）